

光の子



No.88 2000. 7. 1.

- わたしを尋ね求めるものは見だし、心を尽くして求めるものは、
出会うであろう…と主はいわれる。(エレミヤ 29:13-14)



「雨の日はねこと・・・」

え・中島英子

「仮の世」

大げさに揺れてゐるなり今年竹

桐咲くと告ぐるにさへも遠目して

八方へ雨意をひろげて水木咲く

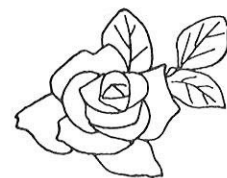
置き去りの薬缶が畦に明け易し

涼しくてきのふのことのやうに言ふ

暗がりに蠟涙そだつ麦の秋

仮の世の色をじわじわ蟬の羽化

黛 執 (『春野』主宰)



虐待について その1

理事長 飯田 進

一九四七年に制定された「児童福祉法」の第四十一条に、児童養護施設の設置目的が次のように規定されています。「乳児を除いて、保護者のない児童、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、合わせてその自立を支援することを目的とする施設」と示されています。これを見てもわかるように、児童養護施設は虐待ケースに対応する主要児童福祉施設として多くの被虐待児童を受け入れてきました。もちろん、現在のように深刻なケースは少なかったように思われます。

戦前の児童虐待防止策としては、一九三三年に制定された「児童虐待防止法」があります。十四歳未満の児童が対象となっていて、保護責任者が児童に暴力をふるったり、放任などの保護の怠慢に触れる行為をした場合、訓戒、条件付き看護命令、施設等への児童委託等が出来ることになっていました。又、児童虐待と見なされることなどをさせた場合、親権の制限禁止が加えられたり、違反した者に対しては法によって罰せられ、懲役刑や罰金を科せられたりしました。この法律は、一九四七年の児童福祉法の制定まで対応してきました。主要な条文は児童福祉法の

第三十四条「禁止行為」の中に盛り込まれていますが、今日に機能しない内容が多いように思われます。しかし、当時、単独法として制定されていたことは、特殊児童の対策であったとはいえ、児童虐待が深刻な社会問題として存在していたことが理解されます。

ここで、海外の国々の虐待防止対策と比べてみましょう。

例えば、英国では一八八四年、ロンドンに児童虐待防止協会が設立され、ついで、一八八九年、児童虐待防止法が制定されました。家庭内の放任児童や虐待児童に保護の手がさしべられることになりました。

米国についてはみると、一八七四年、ニューヨーク児童虐待防止協会が設立され、非行少年の救済・保護や、児童の遺棄、物乞い、軽業などに児童を利用することを防止するための法律を作る運動に協力してきました。

こうした児童虐待防止対策について、二つの国と比べてみると、たとえ国情や国民のニーズが異なるとはいえ、わが国の対策が英国や米国と比べ、約四〇年から六十年近くズレていることに気づかれますが、どのような意味があるのでしょうか。

児童虐待問題はどの時代、どの国

においても発生し、新しい問題ではないのです。しかし、今日のように、児童養護施設の定員の七十〜八十%の被虐待児童が入所している施設があるといわれていますが大変なことなのです。そんな大勢の子どものうちの中には深刻なトラウマ（心的外傷）で苦しんでいる子がきつといるでしょう。そうした問題を確実に援助解決し得る職員の人間性、専門性の向上が、今ほど強く求められているときはないでしょう。



エッセイ

美術館地下三階

若葉の季節がやってきた。爽やかな五月である。大型連休に入るために、世の中が急に活気づく。

ところが私たちにとっては、決して浮かれてられない季節なのである。

というのは、毎年この時期が私たちの会の展覧会になっているからだ。五月一日からもう上野公園の東京都美術館に出ないければならない。明日から始まる作品の搬入に備えて、受け入れの準備をするのである。そして、二日と三日が搬入。次々と作品が搬入されて、いよいよ動き出した。

これに続いて作品の入選落選が決まり、入選した作品だけ会場に移動される。

この後、何やかやと裏方の仕事が続いて、九日にやっとオープンになる。

今年から私は、会計係をやることになった。会計係は、搬入の日と展覧会の初日などが忙しい。この日に会費を持ってくる人が多いからである。美術館の地下三階にある展覧会の事務室にいて、これに対応しなけ

彫刻家 中島 陸雄

ればならない。この時には、お金のやりとりでてんでこ舞いになってしまふ。

しかし、事務室にいと、なかなかおもしろいこともある。

展覧会の初日には十社ほどの美術関係出版社の人が挨拶に来た。若い人が二人ぐらいで訪れる。私が奥の机の所にいるものだから、私を偉い人だと勘違いして、私の所に名詞を出す人がいる。私は単なる集金屋なので、本物の偉い人の方に向けてやるのである。その人たちは、出品目録や会員名簿が必要なのである。そして、この名簿を使って雑誌の購読をすすめたり、或いは又、雑誌への作品の掲載をすすめたりするのである。掲載はもちろん有料なのだ。

展覧会への入場者は、チケットを買って入る人、招待状で入る人などである。

私が招待状を出しておいた横須賀の人たちが来た。毎年来てくれる人たちである。この人たちとの出会いには、小さな思い出がある。

私はある年、沖縄の竹富島に絵を

描きに行っていた。私の大好きな島である。

道端にイーゼルを立てて絵を描いていると、兄弟らしい二人の男の子が、時々絵をのぞきに来るのである。面白い、とても素直そうな子ども達だった。

その子どもたちと私は、たまたま同じ民宿に泊まっていたので、夕食の時、その子どもたちの両親やその仲間の人たちと一緒にになり、お互いに名前も知らない同士で仲良しになっていた。そんなことがきっかけで、毎年この展覧会の招待状を送っているという訳である。あの可愛かった子どもたちも、もはや高校生と中学生。時間の進行は早いものである。

大学の名誉教授であるAさんが来てくれた。

私はAさんの作品が好きである。何となく暖かく、魅力に富んでいて、Aさんのお人柄そのもののように思えるのである。

会場をぐるっと回って事務室にお寄りになって、色々話はずんできた。

Aさんは、私が中学生だった時から、何やかやとお世話になった。当時大学生だったAさんには、私の友だちなどもみんな、Aさんには親し

みを持っていたものだ。そんなことで、今でもその延長線上にいるつもりで、楽しくAさんの話を聞く事が出来た。

Aさんが先生から彫刻を学んでいた頃の話である。

Aさんは等身大の人体を作っていた。心棒作りから粘土付けと、必死になって作品に取り組んでいた。ところがある朝、学校へ行ってみると、Aさんの未完成の人体の下半身が、見事に壊されていた。Aさんの先生がこわしてしまったのである。

《こんな仕事をしていてどうするんだ。最初からやり直したまえ。ごまかしはダメだ》という意味だったのである。

意欲満々の若いAさんにとって、このことは忘れる事の出来ない厳しい指導だったようである。にこにこ、ゆつくりと語られたこの話は、私にとっても、はっとさせられるものがあつた。

現在の教育が忘れかけているもの、或いは失ってしまったものが、ここにあったのではなからうか。という気がしてならない。



2つの文化に生きる

22

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

「文化」と一言に言ってもいったい何ものなのだろうと思う時がある。「日本文化とは何か？」などといった問いに一言でさらっと答えられる人はまず、いないのではないかと思う。「文化」の中には社会、習慣、言語等、生活の中で折り込まれるすべてのことが含まれているからだ。そして、そのすべてを客観的な見方で分析し、説明するにはかなりに時間と研究と、そして、何よりも経験が必要だ。

夫が大学で日本文化科に所属するようになってから私の教授秘書としての仕事の中にもその「文化」を考えさせられる機会がよくある。先日夫が書いたものを訳しながら、なるほどと思わされることがあった。

ちょっととした小話があった。あるフランスのバリの学生がイギリスのロンドンでの一年間の留学を楽しみにしていた。出発する直前にこの学生は担任の教授に挨拶に行き、一年間の留学生活でロンドンについて沢山学べることを楽しみにしていると伝えた。すると教授はこう答えたのである。「もちろん、君はロンドンについて沢山のことを学ぶと思うよ。でも、それよりもバリのことをもっと学ぶことになると思うよ。」

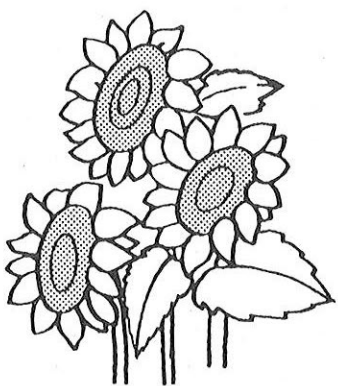
実に外国文化を学ぶと言うことは自分の文化をより深く学ぶことにつながる。異文化を学び、経験することとは自分が育ってきた文化を客観的に受け止め、自分がこの地球という大きな異文化の集まりの中でどこに在るかを確認することができるのだ。そういった面で外国留学とか海外在住といったちょっとした外国長期滞在の経験は、一生の中で一度は経験しておく、残りの人生の中で目が開けることが多々あるのではないかと思う。

夫はまた、こんなことも指摘していた。(外国生活を送って自国に帰った人がよく自分の国の文化を批判することがあるが、それはその人がどちらの文化もあまり深く学ばなかった結果である。またその逆に外国文

化を批判ばかりして自分の国の文化が一番、と自己満足に浸っているのも、これも両文化を理解していないことである。それぞれの文化にはよい面や悪い面が両方あって、その両面を認めることができて初めてそれぞれの文化の大切なことを学んだと言えるのではないだろうか。)

ここで引くかかるのが、何がよい面何が悪い面かということだ。良い悪いは個人個人が判断することであり、私としてはそれぞれの文化をそのままの形で尊敬するということが、異文化を学び共存できる唯一の方法のように思える。結局は「文化」とは、それぞれの国で気が遠くなるような時間をかけて築き上げてきた、言ってみれば、その国の宝のようなものだからである。数年前、ノーベル平和賞を受賞したグアテマラ先住民のリコベルタ・メンチュウさんがこんなことを言っていた。「人類が理想的に暮らすには異文化を尊敬することが最も大切だ。そうしないと差別が生まれてしまう。」

最低二つの文化が共存している我が家ではこの「尊敬」という言葉が家庭平和の鍵への原点となっている。具体的にはお互いの文化を押しつけないことである。いまでも忘れられ



ないのが結婚して初めてのもめ事が食べ物のことだった。尾頭付きのニジマスやムニエルを用意した私に、夫の言葉は「この頭は何だ」だった。私にとっては「ご馳走」なのだが、夫にとっては「ご馳走」でもない気持ち悪い食べ物」だった。それ以来、我が家では魚料理のメニューでは夫のお皿に載るものは尾頭を切り取ったもの、同じ食卓で食べる私のお皿には立派な尾頭付きが載せられている。尾頭付きがご馳走だからと相手を説教しようとするのは相手の文化を尊敬していないことになるからだ。いくらご馳走とは分かっているけど、受け入れられないものもあるからだ。ここでやっぱり相手文化への「尊敬」という言葉が我が家に平和をもたらすことになる。

今年はなんと結婚二〇周年を迎える。まだまだ、相手の文化、そして自分の文化について学ぶことがたくさんあることに感謝である。

学者もどきのつぶやき ④3

いま大学で

山形大学医学部
学部長 仙道 富士郎

「一〇〇分の講義を看護学科の分も入ると計五回こなさなければならず、この歳になると、昨年の講義の内容を半分以上も忘れていたのである。さりとしてウィークデイに講義の準備をする時間もなく、昨週のゴールデンウィークの毎日の朝の時間は講義の準備の時と化してしまっ

しまった。

それにしても悔しいのは、科学に携わる人間としての自分の生命はもう終わってしまったのではないかと感じさせられることである。毎週教室で行っている研究のための討論会にも出席できず、関係論文に目を通す暇など金輪際ないのである。

もう四年足らずで、研究活動から離れなければならない定年の時は確実にやってくるので、そんなにじたばたしても始まらないのではあるが、ある日突然に失職してしまった感じがなんとも辛い。

何人かの友人が同じ職にすでに就いているが、彼らはなに食わぬ顔で学会に出てきて、堂々と研究結果を発表していたことを思い出すのだが、小生があまりにも不器用なのか、あるいは張り切りすぎて、色々なことに手をつけたがるのか、両方なのかもしれない。

それにしても、この職に就いてみて、大学という組織は従来とはかなり変わったものになりつつあることに気づかされている。

というのは、学部長とか病院長とかいった大学の各部門を代表する人たちのかなりの人たちが、何となく能吏といった感じを受けるのである。あまり好きな言葉ではないが、いわゆる大学人の従来の特徴としては、論理性を大事にして、いつまでも一つのことに議論を展開するといったたぐいのものであったはずで、大学は効率性といった概念からは遠いところに身をおいていたと思うのだがそんな良い意味での「象牙の塔」的なイメージはどうに大学からなくな

なっていたらいいのである。

学部長さんたちはあまり恥じらうこともなく、競って発言なさる。その内容は具体的にどうしたいかといういわば技術的なポイントだけで、大学はどうあるべきかといった根本的な議論はほとんど無い。もとも今日か明日にも国立大学が独立法人化され、ある程度の独立採算性が導入されようとしているときに、根本的な議論などと悠長なことをいつていられないのかもしれない。しかし、大学が効率性の一語で括られるようになることは、大学の将来に決して良い結果をもたらすものではないように思えてならない。

確かに、小生も含めた大学の住人たちが、「学問の自由」とか「大学の自由」などの旗のもとに、惰眠をむさぼってきたことは猛省の必要があるが、企業には存在しない「ゆとり」が、大学を大学たらしめていたように思うし、そうしたゆとりから新しいものが生まれてきたのではなかったか。

しかし少子化でいくつもの大学が廃止に追い込まれそうなご時世では、そんなことも言っておられないのかもしれない。

ひとつだけはっきり言えそうなことは、いまだの大学でも大学改革の

お詫びと訂正
本誌第八七号本欄「学者もどきのつぶやき 42」のタイトル「時代の子」を「日草」とお詫びして訂正致します。
光の子編集委員会



大合唱がめじろおしであるが、そこから規定された一定の改革のメニューをいかにスピーディーにこなしても(宿題を一番早く終えても)、それだけでは本質的な改革にはならないだろうということである。改革というのは、まず厳しい内省があり、その内省に基づいて欠点を見出し、それを解決することからしか始まらないからである。

さてさて仙道医学部長殿なかなか勇ましいご託を並べておられるが、おっしゃるようなそんな本質的な医学部改革ができますか？とくとお手並み拝見いたしましょうかという声がどこからか聞こえてくる。

▶ プ ・ リ ・ ズ ・ ム ◀

新任職員紹介



まだ二ヶ月足らずしか経っていませんが、都会での独り暮らしが長かったため、風光明媚な土地での大家族生活はとても新鮮で楽しい日々です。子どもたちも可愛くてたまりません。でも、そう思っているのは私だけで、先輩職員のみなさんは、気の利かない私にイラだっているのではと、反省することもたびたびです。また子どもたちとの仲の良い関係は築けつつありますが、指導員という「大人」としての貫禄は、まだ出ていません。ですから、(怖い?)ベテランの保母さんの休みの日などは、いくら注意しても子どもたちが言うことをきかず、騒乱状態に陥ったりしてしまいます。

よろしく願ひ致します

佐藤家 市川 美穂

私はこの春、明治学院大学社会学部社会福祉学科を卒業し、四月から児童養護施設光の子どもの家の担当者として働いています。

新しい環境で、社会人としてスタートしたこの二ヶ月は、とても早く感じられるものでした。それは、一緒に働く先輩方のフォローや子どもたちの優しさがあつたからこそだと感謝しています。

私は、佐藤家に配属され、幼稚園と小学二年生の姉妹、中学三年生、高校二年生の姉妹の四名の担当者と

なりました。

今はまだ子どもや先輩達との関係作りの段階で、子どもたちと多くの時間関わり方と想っているのですが、思っていた以上に家事労働に時間がかかってしまっています。

また子どもとの関わりには、自身自身の精神状態がとても大きく影響してしまふことを実感する毎日です。私の好きな詩に「自分の体を確認するために鏡があるように、自分の心を確認するために他人がいる」と思えばいいのではないですか」というものがあります。

まだまだ力不足の私ですが、日々の関わり方のひとつでも、結果として子どもたちが自分の思いや考えを確認することにつなげていけたらいいと考えています。

そして、子どもと共に成長していきたいと願っています。走るのはなく、一歩一歩大切に歩んでいきたいと思っています。よろしく願ひ致します。

子どもたちと出逢って

仙道家・倉澤家 中川 昭雄

昨年十一月に児童養護施設光の子どもの家の児童指導員として就任し、子どもと生活を始めて半年ほどが過

これまでの生活で培ってきたキャラクターに何をプラスαしてどういう「大人」の役割を子どもたちに示していけるのか、試行錯誤はまだしばらく続くと思います。そういう意味では、子どもたちの成長と共に己れ自身の成長が、この仕事には必須です。家の周りの田圃はどこも水が張られ、早苗が植えられました。この苗たちが、さまざまな困難を乗り越えて稔りの秋を迎えるように、わたし自身もいつの日かこうべを垂れる稲穂になりたいと願っています。

真剣に関わる

心理職 関 みどり

私は去年の一〇月から、この光の子どもの家に相談室とプレイルームを作る準備を始め、この四月から心理担当の非常勤職員となりました。この半年間、子どもたちを見ていて、ここの子どもたちは成長するための力が弱いということを感じてきました。

乳幼児期に母親や家族に守られていたという安心感を体験することが出来なかったために、大きくなってしまった今も、その安心感を求めることに必死で、自分を成長させる方

ぎました。右も左も分からないまま無我夢中で走り続け、汗を流しています。

さまざまな場面で迷い、悩み、自分のとった行動が他により良い方法があつたのではないかと反省する毎日です。

未熟な者ですが、いつも心がけていることがあります。学生時代から熱中し、夢中でボールを追いかけたサッカーから学んだことのひとつですが、常に状況を把握し、適した行動を幾つか用意しておき、選択した行動を正確に行うということです。

このことは、子どもたちとの生活において、とても役立っていると感じています。しかし、経験不足から、行動の選択肢が少なく、冷静さを保てないことが多々あります。

日々勉強の場として意識し、ただ年月を積み重ねることをではなく、先輩方から刺激を受けて、子どもへの関わりを学び、吸収することが子どもの利益になり、自身の成長につながると思います。

まだまだ役不足の私ですが、最近子どもたちは少しずつ受け入れ始めてくれているような気がしてきています。

今この原稿を書いているすぐ横で、子どもたちが健やかな寝顔で眠りを

向にうまく力が働かないのではないかと思います。

このような児童養護施設の職員として心理職が入るといふ試みは、先例がまだほとんどない状況でのスタートとなりました。

私は、子どもたちが本来持っている力を十分に発揮させ、その子らしい生き方を見つけていくお手伝いをすることを基本的な目標にして、カウンセリング、プレイセラピー、子どもたちの生活観察、職員からの相談と情報交換などを行っていきたくと考えています。

子どもたちの人格を尊重し、成長する力を信じて、真剣に関わるという態度を今後も忘れないようにしながら、光の子どもの家に適した、そして、子どもひとり一人に有効となるような心理職としての関わりとなるように、試行錯誤しながらがんばりたいと思います。

うまく機能していくには時間がかかると思いますが、温かく見守っていただきたいと思います。よろしく願ひ致します。

人生の新しい旅へ

服部 沙絵子

明治学院大学を卒業し、十六回目

楽しんでいるようです。

この子達が、明日どんないい顔を見せてくれるのだろう、と考えると、朝が待ち遠しくなります。

こんなひとときを持ち、味わうことが出来るのが、私にとって最大の報酬だと感じています。

これを励みとして、毎日頑張る、1日でも早く一人前になり、子どもたちと有意義な時間を一秒でも多く共有したいと願っています。

日頃からご支援下さっている皆さまに心から感謝申し上げますと共に、これからも子どもたち・光の子どもの家を見守って下さいますよう、心からお願ひ申し上げます。

こうべを垂れる者に

佐藤家 梶原 完

今年三月、上智社会福祉専門学校を卒業し、四月から児童養護施設光の子どもの家でお世話になっていきます。穴水祐介指導員の後輩に当たります。

こちらに来る前は、精神障害者の作業指導員や、タクシートの運転手などいろいろな仕事をしていました。

九八年にここで実習をさせて頂いて以来のおつきあいですが、ついに就職してしまいました。(爆笑)

の春を迎えた光の子どもの家で新しく職員として初めての春を過ごしております。

私の担当となった三人の子どものうち、二人の女の子は、十六回の季節の中で生活を創り重ねてきた保母さんが担当していた姉妹です。未熟な私の担当となり、様々な場面においてとても不安な状態になっていることを痛切に感じます。子どもたちと生活をともにしてきたこの一ヶ月あまり、私は子どもたちに何が出来るのか考え続けてきました。しかし、私は何も出来ません。だから、何も出来ないところから、子どもたちと一緒に生活を創り始めていこうと思っています。

さて、私の趣味は旅をすることです。旅にはたくさんの出会いがあります。人との出会い、文化や習慣との出会い、そして自分自身との出会い。私は可能な限り旅を続けていこうと思っています。

そして、そろそろ私自身の足で歩き出す新しい人生の旅に出発しなければなりません。光の子どもの家を出発点として、子どもたちと共にその旅を歩んでいきたいと思っています。どうぞよろしく願ひいたします。

現場から

続 光の子らしく

①

岩崎 まり子

光の子どもの家は、田園風景の中に溶け込むようにと、米倉を模して造られました。ですから、今のよう周囲の田圃に水が張られ、小さな稲たちが植えられた時が一番素敵だと思ふのです。昼間などは、その水面に青い空と雲とどんぐりの木々からとんがり屋根を控え目に披露しているさまがキラキラと映り、夜は夜で、空の光がゆらゆらと映る中、闇のグラデーショナルを見るようです。また、蛙の大合唱と遠く響く電車の音など本当に飽きもせず鑑賞してしまふのです。

ご挨拶が遅れました。

皆さま、お元気でいらっしゃいますか。こちらの方では、少し風邪が流行っています。あちこちでコンコンやっています。気温の差が激しい上に疲れも出てくるこの時期の健康管理は、どんなに気をつけても過ぎることはないでしょう。なかなか万全とはいきません。

夜中に布団をかけ直したりするのですが、これは、少し個人的な楽しみのようななっています。寝相にもそれぞれ特徴があり、いつも頭が九

〇度右にズレて寝ている和矢君や、はいだ布団を掛けてやるとすぐ蹴飛ばし、「暑い！」と怒り出す李奈ちゃんなど、想像していた通りの反応に「ボラね、やっぱり、そうだとした」と、夜中にくすくす笑ってしまうのです。

皆様のお子さんはいかがですか。

「寝る」と言えば、うちの子どもたちの中には、夜中に起きて担当者を捜す子どもが少なくないように思っています。

「だって、ボクのママはボクが寝るときにいななくなっちゃったんだもん！」と、泣いて訴えたのは、洋君だけだったように思いますが、きつとどの子にも共通している大きな心の穴がそうさせるのでしょうか。「居なくなったりしないよ」・・・ただその言葉に責任を持つだけのための十五年だったように思うのですが、それさえも伝えきれず、いまでも小さなけれどとても大きな心の叫びに「ここに居るよ。大丈夫だよ。安心して。」と抱きしめるだけしかできないのです。

その洋君ですが、三月に家庭引き

養護メモ 82

暮らしの中で

菅原 哲男

実の親が子どもの生命身体を危うくするような事件が報道され、子どもたちが他者の命を奪うことで自らの存在を消去しようとするような事件も重なり続く。この時代の状況は先が見えなくなってしまうのか、見ないで済まそうとしているのか、判然としないが混沌も極みにある。

ともかく、子どもを産み育てることとはいつの時代でも大事業ではある。そんな大事業を進んでるか、したいと願う人々の数が減少している。

皮肉ではなく、続く不況に商品券を配って景気を良くするとか、少しばかりの児童手当をばらまくことで子どもを産み育てようとする人が増えるだろうなどと本気なのか、テンから選挙民をなめてかかった選挙対策なのか政策とは言えない。そのような対策のための、膨大な借金が自

分の子どもたちに負わされる事実だけでなく、産もうとする心も萎えてしまふだろうと心底思うのである。

子どもを産むことが少なくなったかどうかよりも、生まれてきた子どもたちを丁寧に育て上げることがより大切なことだと思ふのだが、高齢者対策が花盛りの昨今である。その借財を担う子どもたちは、「票」も大きな「声」も持たず、とりわけ大切な親や家族という「票」も失った児童養護施設などの子どもの対策は惨めを通り越して絶望的なのだ。

児童虐待防止法が先の国会で成立し施行が間近である。虐待の防止は全面賛成だが、確実に増加している虐待を受けてしまった子どもたちの対策にはあまり目が及ばなくなってしまうと、心ある児童養護施設に関わる者たちは心配を始めている。



取りになりました。兄が一年前に帰り、次は自分という期待と不安が入り交じった時期、毎週親や兄と話すために電話をしながら耐え、家族みんなががんばった結果の引き取りで、私もとても嬉しかったです。洋君に對してあげられたことはとても少なかつたと思うのですが、最後のみんなへの挨拶で「みんなが優しくしてくれて、ここにきて良かったです」と言ってくれたのは正直驚きでした。

ここに来なければならなかった子どもたち一人一人の成長を思う時、その子のためにどれだけ沢山の人が見えるところ、見えないところで関わり、支え、助けていたことかと思ひます。心から感謝します。

先日、洋君たちに会いに行ってみました。とても元氣そうで安心しました。親のところへせっかく帰れたのだから、また、帰したのだから、それが出来るだけいい方向に進むように応援していきたいと思っています。

喜ばしい退所のあった一方で、私たちの力が足りなくて、不本意な退所もありました。マニュアルや絶対という関わり方がないこの仕事の厳しさを改めて思い知らされます。許されるなら、不本意な退所をしたそ

虐待を受けた子どもたちを引き受ける公的な仕組みは児童養護施設や乳児院などとその周辺で苦闘しているヴォランティアな働きの人たちだけなのである。

その一つである全国五百五十余の児童養護施設に、百力所だけ昨年度後半から臨床心理士が導入された。年間二百万円足らずの非常勤だが、制度化は画期的なことである。

虐待を受けた子どもたちの養育は困難を極める。人間への怖れや不信が心の基底を育てるから、臆病であり自尊心に欠けて関係を作ろうとしないか、非常に下手である。特に若い職員は自分が悪いから、あるいは未熟だからだと心痛める。そこに養育現場を見下すような、心理や社会福祉「学者」がしたり顔で、「安全と安心」をなどと、グルのようなもの言いをするものだから、関わる中で若い職員たちが彼らの周りに群れていく。いつの間にか「権威」に成上がり「学者」たちの弊害が施設現場を更に困難にして後を絶たない。

最近、体罰問題などで、魔女狩りのようにマスコミに曝されているが、児童養護施設はそのはじめから何よりも子どもたちの不安を取り除き、信頼関係をつくることで発達を保障することを目的にして関わり続けて

の子どものための応援者の一人としてつながり、「見捨ててなんか居ないよ」というメッセージを伝え続けていきたいと思っています。一方で、自己満足のためなのだろうかと思問もするのですが・・・

マイナスでしかない理由で出会う私たちですが、少しでもそのマイナスがゼロになり、出来ればプラスに出来るようにお願い、たくさんの方々を支えられながら、新しいメンバーとの暮らしを創っていききたいと思ひます。

心身の疲れの出やすい季節です。みなさまどうぞご自愛くださいように。



きていたのだ。

臨床心理士の制度化と導入は遅きに失したが画期的なことである。色々な意味で専門家や科学者が居ることは有用でなければならぬ。

現に光の子どもの家では、菅野圭樹 児童精神医や、角張正憲心理専門職、阿部真理子・積みどり臨床心理士や、嶺澄子カウンセラーなどの協力無くして子どもたちへの関わりの水準を維持することは出来ないのである。

しかし、あらゆる意味で専門性やすべての科学はよりよい人間の生活に奉仕するもので、それらをよく用いる力量こそを磨いていかなければならないことなのである。

虐待を受けてきた子どもたちも含め、この混沌とした時代に子どもを育てる困難を極める関わりは、困難だからこそ特効薬や合理的な技法などに依るのではなく、時間をかけて、出合いを喜ぶことの出来る生活をしていくことである。繰り返す無様な失敗を互いに許し合いながらかけがえない者として最終的な拠り所になり、信頼関係の基軸を創るのである。見栄えのない普通の暮らしを重ねながら、人格を紡ぎ合っていくのである。大木は、年輪を重ね、不可視の地中に、縦横無尽に張り巡らされた根に依っているのだから。

6月10日に、第7回基準外職員確保のための
バザーを実施しました。
あいにくの天候でしたが、皆様のご協力により、
402,375円の収益をあげることができました。
どうもありがとうございました。また、バザーのため
たくさんの物品をお寄せいただきましたことも、
重ねて感謝いたします。＝光の子ども家バザー実行委員会＝

日誌抄 ＝ 子どもと創る暮らしの風景 ＝

2月1日 ▶ 3月末日

2月
1日 乳児院玉淀園より梨江の担当だった杉田保育士来訪
○ 塩田姉妹の父判決公判 執行猶予付きの有罪判決
6日 昨年結婚して出産予定の溪子の実母より順調と電話
○ 大森哲也・純子長女出産 母子共無事と父より報告
8日 大阪勇の元担任と養護の教師来訪して懇談
9日 父母は北海道へ行って働く塩田姉妹の父母・祖父母
来訪 激励し今後の対応について打ち合わせ
10日 納紀悠子県立幸手商業高校に推薦入学試験合格
○ 林碧日本大学 佐藤摂東京国際大学に合格
12日 菅野ドクター来訪診療とスーパーヴァイズ
14日 リズム時計本社よりミネラルサウンズクロックの贈
呈式
24日 不動岡病院に入院中の嬉の退院後について福祉事務
所及び児童相談所・不動岡病院と協議 職業訓練セ
ンターへの入所を進めていくことを確認
28日 山梨県立正校正園より職員8名が来訪し見学懇談
○ 『嬉の出発の会』開催 富士見乳児院で担当の宇波
保育士や東大宮教会の教会学校の教師たち6名など
が思い出を語り今後の働きや生活を励ました
今月の物品ご寄贈者 関東商事 立正佼成会古河教会 横
須賀市白砂千衣子 鷲宮町木場田綾子 パーラーMIMASU田
畑忍 リズム時計株式会社 青木史江 久喜市山田の各位

3月
1日 高山嬉 美里職業訓練センターへ仮入所 措置停止
5日 佐藤摂 東大宮教会山ノ下牧師司式によって洗礼を
○ 埼玉県立高校入試合格発表 一志・沙慧合格を祝う
8日 県立高校卒業式 森紅子 塩田潔 山尾章卒業
10日 北埼玉福祉事務所岩瀬ケースワーカー、青木主幹来訪
13日 『第4回出発の会』実施 生活した仲間や中学教師
教会学校教師 後援会役員 学習ボランティア 家族
など大勢が進学し働く3名を励ます 感動の一夕
15日 朝日新聞奨学生・毎日新聞奨学生それぞれの任地へ
16日 山下一志 納紀悠子 大阪沙慧大利根中学校卒業式
17日 大利根藤幼稚園卒業式 綿南大賜 山上博幸園
23日 原道小学校卒業式 納紀詩美卒業
25日 第59回理事会 事業計画・予算を承認 辞令交付
○ 光の子どもの家「子ども家庭支援センター」竣工式
竣工感謝礼拝およびお祝いの会に約100名が参集
27日 和野賢一・雄也入所 佐藤家岩崎まり子担当
○ 茨城静矢入所 倉澤家倉沢智子担当
31日 瑞麻美倅入所 倉澤家倉沢智子担当
○ プロ野球開幕戦を東京ドーム長島ボックスで観戦
○ 山尾章、森紅子、塩田潔措置解除
○ 下山英哉（在職五年）木部すなお（在職四年）退職
今月の物品ご寄贈者 関東商事 はむこ会 篠原俊雄の各位様

反 射 光

☆梅雨空に登校の甲高い声が貫いて
走ります☆お陰様で定員外職員を確
保して二名の退職に三名の採用がな
りました☆昨年度途中補充の中川も
含めた新たな息吹に満ちている光の
子どもの家の様子をプリズム欄の特
集しました☆数年ぶりに岩崎まり子
が現場から報告してベテラン健在を
示しています☆四月から多くのご協
力と法人の努力で光の子どもの家
「子ども家庭支援センター」を開設
し事業を始めています☆五木田供三
館長をいただき、阿部真理子臨床心
理士の指導を受け、積みどり臨床心
理職員にカウンセラーの嶺澄子氏を
加えて、月に一日程度菅野圭樹児童
精神医、角張正憲心理専門職がおい
でになり、施設長と竹花信恵副施設
長が兼任して体制が整いました☆何
とか地域の抱える養育や家庭の問題
の解決に役立ち、すべての子どもた
ちの健やかな成長を実現したいと願っ
ています☆こんな風に先の見えない
この時代に向かって、今年度を前の
めりに迎え突き進んでいます☆ご支
援を！更に！
(哲)